



文：太田哲也

レーシングドライバーとして、そしてレース競技長として活躍していた山路慎一さんがかねてからの病氣療養の甲斐なく急逝された。山路さんと言えば、太田さんとは切っても切れない因縁がある。そう、彼は太田さんにとって「命の恩人」なのだ。今回はそんな山路さんの勇敢なふるまいを忘れないための追悼企画である。

も しもあなたが、高速道路を走行中、事故に遭ったばかりの車を見たら、躊躇なく急ブレーキを踏んで救助に向かうだろうか。迷っている時間はない。「たぶん道路公団がすぐに来るだろう」などと思っただろううちに、通り過ぎてしまつのではないか。

リスクを考えて何が正解かという話は別として、そんな勇氣ある行動を瞬時に取れるレーサーは俺は知っている。そもそもレーサーという人種は押し並べて「自分が一番速い」と思っていて、そうでなければ時速300kmオーバーで

競争できない。多かれ少なかれ利己主義が強いだろう。しかし山路慎一というレーサーは明らかに違った。今回は彼を読者のみんなに紹介したい。

**山路慎一×太田哲也
 二人の接点は雨の富士**

山路慎一、日本のプロドライバー、1994年から全日本GT選手権に出場。俺とは同業者だが、それまで彼との接点は希薄だった。俺はフォーミュラやプ

ロトタイプを主戦場とし、彼は主にツーリングカーレースに出場していた。畑違いの選手がGTレースで競争相手として出会っただけだった。

大きな接点は1998年5月3日、暴風雨の富士スピードウェイ、GT第二戦でやってくる。激しい雨で視界不良のフォーメーションラップで第一事故が発生。それを避けようと俺はフェラーリF355GTとともに安全地帯に回避したが、そこには

第一事故でクラッシュしたボルシェがいた。衝突、爆発、炎上。



▲太田哲也 ドラスをさ呼た好っおす
 イングレックを「説」でにだっす
 の山路慎一と「実」に人柄福を
 する。自ら「誠」の人の冥福を
 教ぶが、さんかされるご祈り
 祈りいたしま

**いつもそばに
 クルマが**

自分を含め、ひと月ほど前に、事故車両は、ひと月ほど前に、自分を鈴鹿のS字ではじき出し

たフェラーリとそのドライバーだった。それでも車中から引きずり出して救助を続けた。

再会は、初恋の人に会うようなドキドキ感と照れくささが混じりあっていた。でも彼の笑顔はすべてを許容してくれている感じだった。

そこに後続の山路慎一の選手が差しかかる。一瞬の判断で急制動してハainesをはずしてマシンから飛び降り、コース脇の消化器を抱えて燃え盛るマシンに近づく。消火剤を噴霧し一人で消火をした。

それが現実化したのがその年の12月で、うちの事務局が「山路さん呼びませんか？」と提案した。俺としては「果たして来てくれるかなあ？」と緊張していたが、山路選手は快諾して

関係が急接近したのは2012年、イベントでばったり出会った。笑顔で握手。俺がドライビングレッスンをやっていることを知っていて、どちらからともなく、「今度一緒に何かやる？」と言葉を交わした。

とくに印象的だったのは次のくだりだ。「これは一般道でも同じです。中にはモラルの欠けた運転をする人を見かけるかもしれないけれど、それを含めて交通社会をリスベクトする。そういう変な人も守ってあげる気持ちを持って、自然と交通事故も減るはずですよ」

俺にとつて「同業者」ではなく、近寄りがたい「畏敬の存在」となっていた。

「サーキットを全開で走るとき、まわりのライバルに勝ちたいという気持ちは必要だけれど、同時に共に走る者同士、リスベクトしなければならぬ。お互いは起きない」

ワークスに栄転、さらにレーシングスクールの講師、富士スピードウェイの競技長も務め、レース界の中核的人物となった。

「サーキットを全開で走るとき、まわりのライバルに勝ちたいという気持ちは必要だけれど、同時に共に走る者同士、リスベクトしなければならぬ。お互いは起きない」

ワークスに栄転、さらにレーシングスクールの講師、富士スピードウェイの競技長も務め、レース界の中核的人物となった。

「サーキットを全開で走るとき、まわりのライバルに勝ちたいという気持ちは必要だけれど、同時に共に走る者同士、リスベクトしなければならぬ。お互いは起きない」

ワークスに栄転、さらにレーシングスクールの講師、富士スピードウェイの競技長も務め、レース界の中核的人物となった。

「サーキットを全開で走るとき、まわりのライバルに勝ちたいという気持ちは必要だけれど、同時に共に走る者同士、リスベクトしなければならぬ。お互いは起きない」



◀1998年5月3日、全日本GT選手権第2戦・富士でのオープニングラップの事故。火に包まれた太田さんのクルマを、一番に消火にあたったのが山路さんだった

アイデンティティだった 命の恩人を失った悲しみ

2014年5月26日、山路慎一選手が永眠した。享年50歳。16年前に発病、不治の病とされた。新薬の効果で一時的に良くなったが、昨年からまた病状が悪化し、輸血しながら競技長を務め上げたそう。

彼が亡くなり、改めて自分の中で存在の大きさに驚いている。仲が良いとかそんなことではなく、俺のアイデンティティだったのだ。彼がいなかったら間違いなく俺はこの世にいない。歳も俺より若い。それなのに俺に生きる資格があるのだろうか。訃報を聞いてからずっと罪悪感に苛まれた。

山路選手をはじめとする多くの人から再び与えられた命をどう使うべきなのか。自分のことだけを考えてはいけない。果たすべき義務がある。そんな後ろめたさも感じ、復帰後は仕事に絡めつつも社会に還元する活動をしなければなら

ないと考えてきた。でもまだまだ足りていない状態で山路選手が亡くなってしまった。生きていくうちにもっともつと義務を果たすべきだった。

挫折感と申し訳ない気持ちでお通夜を迎えた。盛大で、参列者には泣いている人も多く、彼の素晴らしい人柄を改めて感じた。顔を見て「山路選手」と呼びかけたが目を瞑ったままだった。悲しいけどもう山路選手はここにはいないことを理解した。奥様と息子さん、ご両親にも会った。みなさん優しい人たちだった。恥ずかしいくらい大粒の涙が出た。

山路選手といえば「説教ジジイ」として有名だった。自ら「趣味は説教」と公言する。スクールに入校した若手レーサーに速く走ること以前に「まずは親に感謝しろ」から始まるそう。確かにドライバーはテクニク以上に「心の持ち方」が重要だ。理には適っているが……。斎場の出口にはブログ「山路慎一の説教部屋」から抜粋された「山路語録」が貼ってあった。どれも熱く、優しさに満ちた心

情がストレートに語られていた。その中でも俺が釘付けになったのはこの一節だ。少し長いので抜粋して紹介したい。

「富士スピードウェイを走行した事のある人は、ご存知だと思えますが、100Rから見える富士山が綺麗です。よそ見をすずめているのではなく、走っている時は沢山の情報収集をしなければなりません。一瞬の出来事です。その光景は最高です」

「サーキットはタイムを削るだけの場所ではありません。正しい運転を身につける場です。正しい運転が出来ないと、いつまでも見えないものがあるのです。正しい運転が出来ると綺麗な富士山が見えてくるのです。すると感謝の気持ちが日々強くなるのです」

「これからも俺だけの特別な風景を刻んでいきます。皆さんも一緒にたくさん特別、な景色を焼き付けてください」

広い視野と周囲へのリスペクトの気持ち、愛情と言い換えてもいいかもしれない。こうした精神の持ち主だからこそ、あの事故のときあの状況で消火活動ができたのだ。

勇敢・誠実な山路魂を 語り継いでいきたい！

お通夜から二週間が経った日、山路慎一選手のご自宅に伺い、10年間病氣と共に連れ添った奥様と話させていただいた。「いつも私に、できなくてもできるよりにしなければダメだ、と言っていました。本当に説教ジジイでした（笑い）。でも今考えると私たちの将来を考えて、自分がいなくなってもやっていけるようにということだったのですよね……」

モータースポーツ界の未来も心配していたそう。難病の子たちにも何かしたいと考えていたらしい。自分の寿命がわかっていて、何かやり残したことはないかという気持ちが強く働いたのだろう。

俺自身のことにも気にしてくれていたそう。初めて知った。「山路は、『太田さんを助けてしまつて本当によかったのかな……』と言っていました」

それを聞いて思わず「あっ」と声が漏れた。俺はあの事故から一年間、将来像がまったく見えず自暴自棄になり、「事故のとき死なせてもらいたかったの

に」と思い続けた時期が確かにあったからだ。けれどもその後前に歩き出したらまわりが見えてきた。そうしたら感謝の気持ちで強く沸いてきた。彼はそこまで考えていてくれたのかと思つて、目頭が熱くなった。

祭壇を見上げると、写真の中で競技長のジャケットを着た山路選手が笑っていた。部屋には彼が好きだった矢沢永吉のCDがずっと流れている。お経の代わりだそう。

帰宅途中、今夜は俺もずっと聴こうと思つて永ちゃんのCD四枚組みを買った。一枚目のCDをかけたならその1曲目の歌詞に、「幸せなら、いいけれど」と流れてきて、ハッとした。山路慎一選手に言われたような気がしたからだ。

気持ちが大きくグラついたときもあつたけど、今ははっきりと言える。「幸せだよ、山路、氣遣い、本当にありがとう……」

広い視野、そして強さと優しさ。俺は生来が我侭で彼のようにはなれないが、なろうと努力することはできるはずだ。助けられたからではなく、心底、多くの人に彼のスピリットを知らせることが使命だと確信した。

読者のみなさんも、是非多くの人に山路スピリットを伝えてほしいと願う。

「レースでも一般交通でも、まわりをリスペクトして守ってあげると気持ちを持てば、事故は起きない……山路慎一」